

但既に成功するた部分は其成蹟を詳記し其成功未成功の區別を圖面に朱記す可し

第十九條 土地貸下を出願中のもの若くは土地貸下の許可を受けたる者にして地元戸長役場部内に居住せざる時は其部内の居住者を以て代人に定め地元戸長役場へ届出の可し居住者不在のときも亦同し

第二十條 規則第二條但書に依り土地貸下を願出する時は第三條規定の外起業設計書を添付す可し

但實測圖及び財産調書を徴するとある可し

第二十一條 左の事項に該當するものある時は其願書を無効とす

- 一 第六條の規定に従はざるもの
  - 二 土地貸下を許可するに際し本人若くは代人の所在不詳にして六十日を過くるも尙ほ指令書を下附するに由なき時
- 第二十二條 左の事項に該當するものある時は返地處分を結了したるものとす
- 一 第十三條の期限内に受書を差出さざるもの
  - 二 本人若くは代人所在不詳にして六十日を過くるも尙ほ返地命令書を下附する

に由なき時

附則

第二十三條 従前の手續に依り土地貸下期限中のものは總て此手續の規定に従ふ可し  
第二十四條 本年三月三十一日以前に貸下を出願したる土地は本手續第一條に依るものとす

書式第一號 (用紙半紙)

土地貸下願

何國何郡何町(村)字何々番地

一原野地 略 何坪 田(畑)(宅地)略の見込

(他に土地貸下の許可を得たるもの又は土地貸下出願中の者は左の事項を附記す可し)

外

何國何郡何町(村)字何々番地に於て明治何年何月何日土地貸下許可の分

何坪

田(畑)(宅地)略

内何坪

明治何年何月迄成功



何坪

未成功

何國何郡何町(村)字何々番地に於て明治何年何月何日土地貸下出願中の分

何坪

田(畑)(宅地)

右北海道土地拂下規則並全施行手續を遵守し別紙起業方法書の通り無相違成功可致候間該地積御貸下相成度此段奉願候也

何府(縣)(北海道)何國何郡(區)何市(町)(村)字何々番地

戸主(某何男)職業

「當時何國何郡(區)何市(町)(村)字何々番地(某方)寄留」

明治何年何月何日

氏名印

北海道廳長官宛

前書之通出願候に付進達候也

明治何年何月何日

區戸長 氏名印

書式第二號 (用紙半紙)

起業方法書

一原野地

何坪別紙圖面の個所

一何國何郡何町(村)字何々番地

一全地に目通何尺廻何木何本(樹木無之)

一田(畑)(宅地)(海産干場)(牧場)の見込

一農(工)(商)(何漁)業若くは何製造(牧畜)(養蠶)經營並に其着手順序の詳細

一明治何年より何年迄何年間御貸下同年限内に全地成功其毎年事業の配當は左の如し

初年 (明治何年)

何坪田(畑)に開墾

但普通農具何々又は西洋農具何々(馬何頭)を用ひ家族何人労働若くは小作人何

戸又は耕夫何人(此金何程)を以て田(畑)又は何々に墾成牛(馬)(羊)(豚)飼育

飼育(頭に購入するものは其種類頭數金額を詳記す可し)

小屋掛(居小屋)(牧舎)何棟何坪造築(此費用金何程)

道路延長尺 何間新開(同上)

二年目 (明治何年) 何坪田(畑)に開墾(何牧草播種)

但し(初年の例に準し詳記す可し)

牛(馬)(羊)(豚)何頭飼育(新たに購入のもの之番種のもの之を區別し購入の分は種類頭數金額を詳記す可し)

排水延長尺 何間新開(此費用金何程)



堤塘延長高何尺數何尺馬路何尺何間新設(同上)  
 三年目 (明治何年) 何坪田(畑)何々開墾  
 但(初年の例に準し詳記す可し)  
 養鷺室(何製造場)何々何棟何坪造築(此費用金何程)  
 牧柵延長何寸角又は丸太高何尺何間新設(同上)  
 四年目 (明治何年) 以後各年の分は前例に準し詳記す可し  
 一風防(薪炭用)地等として存置す可き木立地何坪樹木何々何尺通何本(立木無之に付何年目(明治何年)に於て何木何本植付の見込)  
 一鮭鱒鱒建網引網差網何艘明治何年何月迄に準備  
 但明治何年何月何日何漁業若くは何海藻採取營業許可又は出願に付明治何年何月より漁業に着手の見込  
 一何年目(明治何年)より牛馬豚羊何種北何頭畜何頭蕃殖毎年何々何頭販賣何々何頭宛飼育の見込  
 右之通相違無之候也

右願人

明治何年何月何日  
書式第三號

氏 名 印  
 願 人 氏 名 印

何國何郡何町(村)字番地

一原野地 何坪

此譯 甲 何坪

乙 何坪

丙 何坪

丁 何坪

第三圖參看

備考 基點 道路河川の辻若くは近接貸下地等の隅角(若し之れ無き時は大標を設立す可し)の如き移動なき箇所に「○」を以て基點を明らかにす可し「●」は朱書にす可し

繫線 前項基點の例に依り一筆毎に二箇所以上を質測し朱點を施し其間數を記入す可し



右の外四至の景況を詳記す可し

書式第六號

願人

氏名印

何國何郡何町(村)字番地  
元貸下地何坪

(本項朱書)

何反何畝何歩

拂下願地

一段別

甲畑

段別何反何畝何歩

(イ)

何拾何坪何合何夕

此二除何拾何坪何合何夕

乙畑

段別何反何畝何歩

(イ)

何拾何坪何合何夕

此二除何拾何坪何合何夕

丙田

段別何反何畝何歩

(イ)

何拾何坪何合何夕

(ロ)

何拾何坪何合何夕

(ハ)

何拾何坪何合何夕

計何百何拾何坪何合何夕

此二除何百何拾何坪何合何夕

丁 風防林

段別何反何畝何歩

(イ)

何百何拾何坪何合何夕

此二除何百何拾何坪何合何夕

合段別何町何反何畝何歩

外

道路敷地 段別何反何畝何歩



用悪水路 段別何反何畝何歩

備考

道路河川の辻若くは近接貸下地等の隅角(若し之れなき時は大標を設立すべし)の如き移動なき箇所二箇所以上に繋線を施し實測間敷を記入す可し丈量は實地に於て

三斜を施す可し

道路河川及び溝渠を挟むときは分筆(例へば甲乙の如し)に丈量す可し

風防薪炭用地は別筆にす可し

新設道路及び用悪水路敷地にして公共の用に供せざるものは其墾成地積

に算入す可きを以て外書を要せず

一筆内を分筆する時は甲乙丙丁の符號により相當番號を付す可し

右の外四至の景況を詳記す可し

書式第四號 (用紙半紙)

事業成功程度御届

明治何年何月何日貸下許可

何國何郡何町(村)字何々番地

貸下總地積

一田(畑)(宅地)略

何坪

初年成功地積

外家屋(居小屋)略何棟何坪造築濟

(二年目以後は左の如く内譯を付し其總計を本項に記入す可し)

内 何坪

初年成功

又は 自初年 至何年目 成功

外家屋(居小屋)何棟何坪造築濟

何坪

何年目成功届出たる年の前年中の成功したる分

外牧舎(何製造場)略何棟何坪造築

右成功の實況御届仕候也

何府(縣)(北海道)何國何郡(區)何市(町)(村)字何々番地

戸主(某何男)職業

「當時何國何郡(區)何町(村)字何々番地(某方)寄留」

明治何年何月何日

氏

名 印

北海道廳長官宛

右届出候ニ付進達候也



明治何年何月何日  
書式第五號

區戶長 氏 名印

貸下土地拂下願

何國何郡何町(村)字何々番地別紙圖面の箇所

元貸下地何坪

一田(畑)(宅地)燈

何町何反何畝何歩

但明治何年何月何日貸下許可(他より譲受又は相續者等名義書換をなすものは下文の如く附記す可し)何町(村)字何々番地何

某より譲受又は相續名義書換

右は北海道土地拂下規則に依り御貸下の處今回全地墾成(又は何々事業成功)候に付地代金上納

可致候間御拂下相成度別紙圖面相添此段奉願候也

何府(縣)(北海道)何國何郡(區)何市(町)(村)字何々番地

戶主(某何男)職業

「當時何國何郡(區)何市(町)(村)字何々番地(某方)寄留」

明治何年何月何日

氏 名印

北海道廳長官宛

前書之通願出候に付進達候也

明治何年何月何日

區戶長 氏 名印

一戶籍寫

原籍市町村若くは區戶長の證明あるもの

一左の雛形に準據したる實地の圖面

(届書式)

御届

何國何郡何町(村)字何々番地

一原野地燈何坪貸下出願

但明治何年何月何日何戶長役場へ提出(一人にしてニヶ所以上を出願したるものは一ヶ所毎に前記の如く列記す可し)

右本年三月告示第二十一號の趣に依り別紙戶籍に圖面相添此段御届仕候也

現住所(出願當時の住所に異動あるものは新舊共に記載す可し)

明治何年何月何日

氏 名印

北海道廳長官宛

何國何郡何町(村)何番地

願人 氏 名印

一原野地燈何坪



此譯

- 甲 何坪
- 乙 何坪
- 丙 何坪
- 丁 何坪

備考

基点 道路河川の辻若しくは近接貸下地等の隅角(若し之れなきときは大標を設立すべし)の如き移動なき個所に「○」印を以て基点を明らかにすべし  
 「◎」は朱書とすべし

繫線 前項基点の例に依り一筆毎に二個所以上を實測し朱點を施し其間數を記入す可し

間數 地域に従ひ周圍に間數を明記すべし

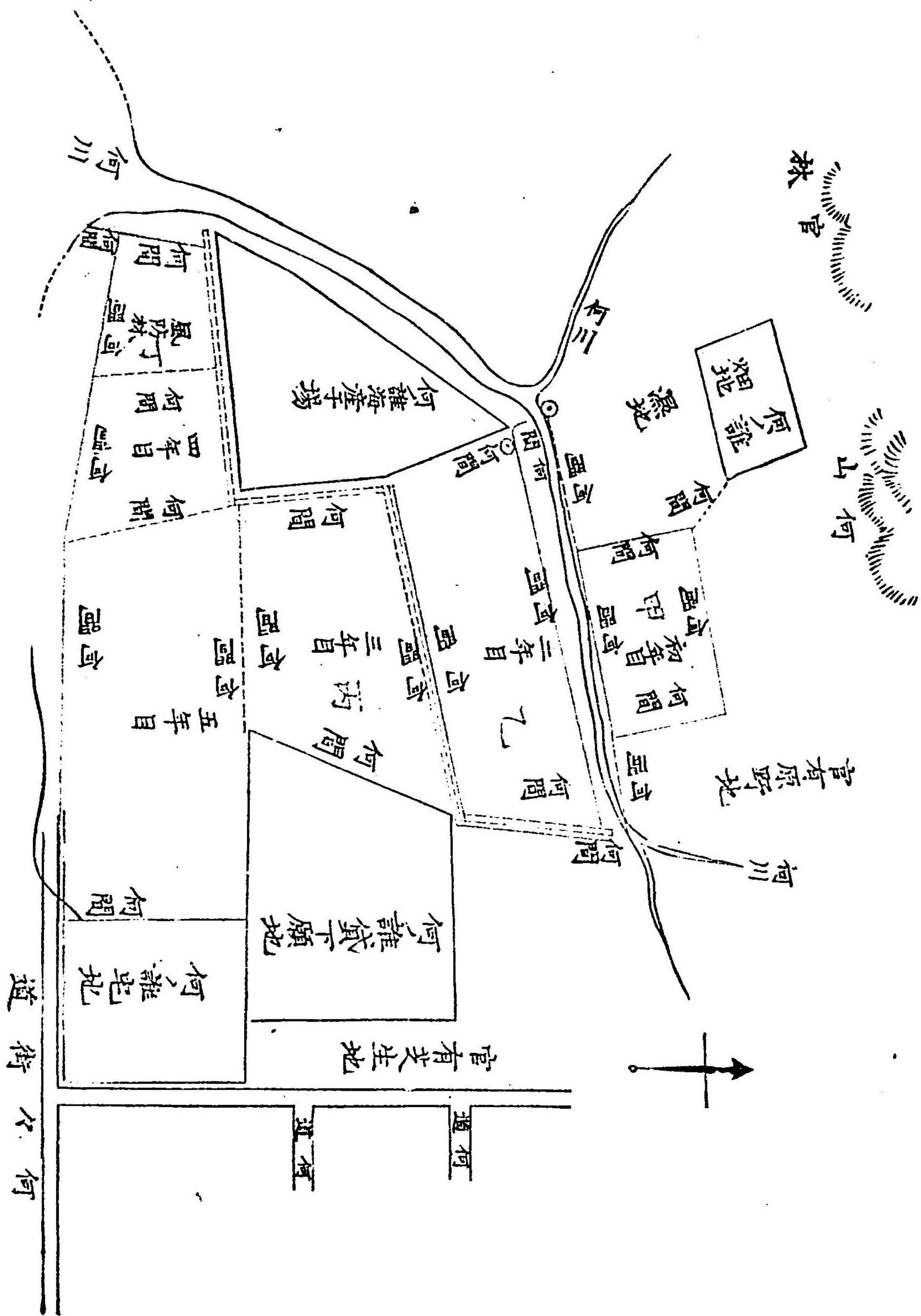
區劃 數年に配當し開墾するものは其區域に朱線を引くべし風防薪炭用地區域もまた全し

除地 道路河川及び溝渠を挟むときは各筆(例へば甲乙の如し)にすべし

敷地 新に道路及び用悪水路を設くるものは其個處に二條の朱點を施すべし

右の外四至の景況を詳記すべし

書式第三號

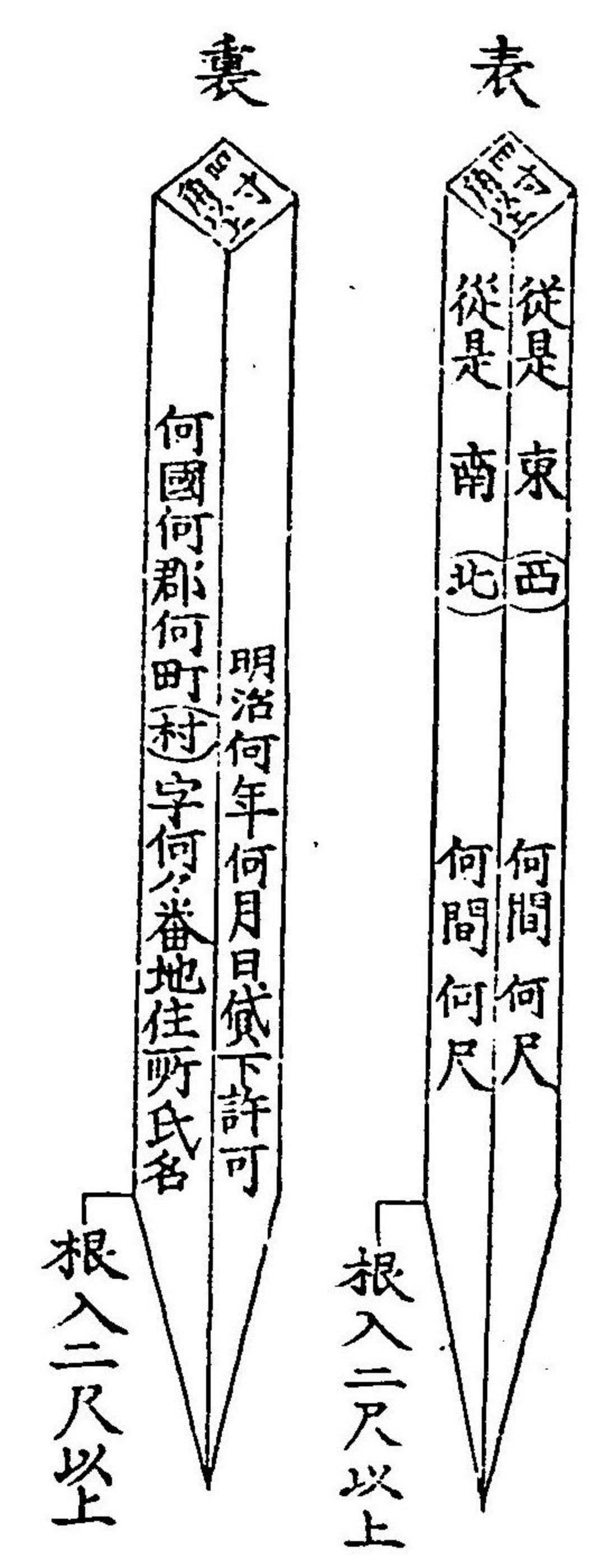








### 標木雛形



余は前九章に於て當道記事の大要を講究し終れり是れより歩を進め文學政事宗教工商業等に就き簡單なる記事と及び之れが現時の内狀に向つて評論を試みんと欲す而して余は茲に讀者に向つて注意を注はんとするの一事あり即ち當道の現狀は日本本州と異なり創開年尙は淺く百事混亂して未だ整然たる秩序を得ざるなり此故に開明の頭上に論す可き問題を以て半開の地に配當するは到底立論の誤謬なきを得ざるのみならず抑も此を以て定見とする能はざるなり何んとなれば當道の如き半開地においてには都港を除き他は大抵商業開墾等に文化的思想を奪去せらるればなり此故に都鄙相折衷し斟酌して立論するに非ざれば此問題を解するに適當なる答案を得る能はざる可し於是乎余は當道中殷富にして且つ勢力ある函館小樽根室札幌を代表として之れを論するは最も適切劃當なりと信せり然れども單に此四處を以て當道に於ける文學政事宗教の大体を定むると能はず何んとなれば文化遍き地のみを論して偏僻に及ぼさざれば事實上大に誤謬を生ずるの恐れある可ければなり此故に余は勉めて斟酌を取り折衷を主として一般に之れを論及せんとす此れ余が立論の主旨たる大刀と小刀とを以て片肉を裁るの定見なればなり



第十章 第一 文學

常道文學の程度高からず然れども現時に於ける當道の文學は複雑なる詩學的にあらすして寧ろ單純なる哲學的に傾向せるが如し而して各種の公私學校及び新聞雜誌協會の如きは土地の面積に比し其數少きが如しと雖ども之れを創開年尙淺き地に對照すれば更らに其少きを覺ゆる可し

新聞雜誌協會の重なる設立地は根室小樽札幌及び函館となす即ち札幌に北海道毎日新聞北門新報新北門小樽に北辰日報あり根室に根室毎日新聞あり函館に函館新聞北海新聞北海民報あり全道凡て八新聞となす雜誌の重なるものは北海之殖産北海時論北海工業雜誌農藝雜誌海北公論護國之楯教育雜誌及び醫學記等あり

高等學館の重なるものを擧ぐれば函館には専門に屬する商業學校及び遞信省に屬する商船學校あり札幌には師範學校及び官立農學校あり其他は大抵公立の小學に非らざれば私立の學館及び小學なり然り而して札幌は創開爾來夙日に常道文學の淵藪となり是れより文化を四方に及ぼす可き中心點なるを以て之れか潛勢力は他の都港に超然卓立して殆んど王商業の勢力を壓倒し北海文壇の樞軸を執れり而して函館福山

江差壽都小樽宗谷網走根室厚岸室蘭の如きは商業地なるを以て文學の勢力は札幌より大に劣れるを覺ゆ殊に西部に於ては學校の數頗る多きも東部は之れに反し殆んど西部の五分の一に上らず而して明治二十年爾來最近五ヶ年間に於ける公私學校各種學校教員生徒及び就未就學員數の總計を擧ぐれば左の如し

年次	學校數	教員數	生徒數	卒業生數
明治二十年	三〇八	三八四	一九、六七八	九四五
全二十一年	三三二	四二〇	二二、四一二	一、二八八
全二十二年	三七〇	四四五	二九、二二四	一、九二九
全二十三年	四〇四	五九二	二八、〇〇〇	?
全二十四年	四一四	六七五	三一、三五〇	?
明治二十一年	二一、九八三	三〇、三九三	二、四八〇	二、四八〇
全二十二年	二二、九一三	三一、三四三	二、九八三	二、九八三
全二十三年	二六、八八〇	三一、九四四	三、六六〇	三、六六〇
全二十四年	三〇、〇五七	三八、六六〇	三、七二八	三、七二八
全二十五年	三六、一七六	三六、五七八	三、九二二	三、九二二



於是前後五ヶ年間に於ける當道文學の進歩を観るに百〇六校二百九十一教員一萬一千六百七十五生徒一万四千九百九十三就學生六千八百八十五不就學生を増加せり左に各種公私學校の種別を擧げて之れを示す可し

年次	公立小學	私立小學	各種公立	各種私立
明治二十年	二六三	二七	四	一四
全二十一年	二七六	二六	三	一七
全二十二年	二九二	五二	五	二一
全二十三年	三〇九	六二	五	二八
全二十四年	三二二	七四	五	二二

即ち前後五ヶ年間に於ける各種公私學校の數を見るに公立學校五十九私立學校四十七各種公立學校一を増加せり而して現時に於ける高等なる私立學校及び公立學校の如きは外觀の宏壯なると與もに内部も頗る整頓せる秩序を得之れに反し私立簡易科殊どに水産地新墾地に設置せる學校の如きは内に完全なる規律なく外に純善なる學制の實施なく不整頓を以て校舎の腦髓を組織するが故に不識不知從學少年をして良能の開発と文學的思想の發達を薄弱ならしむ此れ大に理あるなり何んとなれば元來

當道内外の潜勢力は絶へず工業にのみ趨りつゝあるを以て沿海地方の水産業に於ける内部地方の開墾事業に於けるが如く絶えず實業に従事するの外他事なければなり特り都港に於ける中等以上の社會のみは文學に従事するの餘裕あるが故に幾分が文學的思想を養成するに足る可しと雖ども新渡航者及び中等以下無職の新土着者の中二三は其當初に於て當道物價の貴さが爲めに困難なる活路の退ふ所となり不識不知學事に従ふと能はざるものあり是れ新開地に於て免る能はざるの事實なりとす抑も當道の各種學校中宗教的學校は割合に多きを占め之れに反し法律及び政事的學校は殆んど稀れなり而して前者は重みに女學校にして外人の設立に係り宣教の爲め内部は宗教的に之れを構成し女子教育の必須を唱道し側ら布教の政略を取れり蓋し此宗教的學校は當道文學の發達に潜勢力を附與する少々に非らざる可し何んとなれば文明的新思想を注入して開化的の泰西風を開發せしむる指導たればなり案するに當道文學の程度は新開地の點より見れば頗る高度に位せるも既開の般盛なる都港地に對照すれば文化旺盛と稱するを得ず此れ他なし什中八九は工業にのみ従事するを以て學問の餘暇少なく之れに加ふるに什中二三を除き實業家の熱心に教育の大任を負ひ身を薰陶の犠牲となして教育社會に疾呼唱導するもの少きが故なり



殊とに新開地及び海産地に於ては高眼なる文學者の蹙呼を試むるものありと雖ども此れ等は大聲俚耳に入らずして却つて鈍眼者の爲めに幾多の排撃と嗤笑とを受け辛ふして其見識を實行し得るもの殆んど稀れなり加之有力なる富豪者の過半は重も學事の衝路を避けつゝ商道に向ふもの多きは是れ文學の商業社會と相並行して進む能はざる所以なり蓋し衣食足りて禮節を知るの古諺に隨ひ之れを察するに當道は創開以來年尙は淺きを以て絶えず冒險家の突入するが故に各種の工商政は相混亂し唯利を求め財を集むるに汲々として世事に齷齪するの外文を學ひ筆を執るの暇なし此故に中に三四の熱學者あるも微々たる小勢は以て滔々たる商工者の潮勢を牽制するに足らず而して工商人中稀れに文學者なきにしもあられとも彼等は秩序不整なる商業界に立つが故に商事の羈絆する所となり不識不知學術的藝能の何分を削殺せられ随つて商事に經驗の必要にして文學の必要を感じる多からざるを考へ之れを顧みざるに至るもの多しとす勢ひ斯くの如くなるを以て當道中の勢力ある商業地に於ける文學の發達力は終始怒濤の波浪中に浮沈して著しき發揚を見る能はざるなり就中外國人の宣教本州人の布教は兩ながら與もに幾何の文化を進歩せしむる媒介となれりと雖ども間接なる潛勢力は實効を奏する急著なる能はざるなり

按するに將來東部北海道の諸原野に於ける殖民事業の發達し内に新富源の發見せられ外は政事的思想に刺撃せらるゝの時こそ是れ文學社會の漸くに發達を始むるの時期にして此時代よりは工商の勢力と其權衡を均ふるを見得べきなり矣

## 第二 政事

當道政派の區分判明ならず政事の思想一般に發達せず随つて其勢力も單純にして輕跳なるを覺ゆ就中二三の黨派ありと雖も此等は文學と同しく工商熱に壓倒せられて脱穎の勢ひを滅殺せられ爲めに昂然著大の運動をなすを得ず偶々活動を試むるものあるも西部中の函館小樽札幌の如き都港に於て工商の裏面に於て唱導するのみにて東部に於ては殆んど寂寥たる勢を免れず而して工商人中稀れに政事談を口にするものありと雖も單に皮相的模擬の鸚鵡者流に過ぎずして熱心着實に之れを唱導するものあるを見ず僅かに代言人新聞社員官吏及び二三小辨家の時に暗冥社會に向つて電光を閃かすに止まるのみ他は凡て雷同し附和して反覆常なく曖昧の間に浮沈して主義なく持論なし此故に直立徑行偏せず黨せず一旗幟の下に團結して動かさる者殆んど稀れに所謂一犬虛に吠ゑて萬犬之れに應ずるが如く過激にして巧辨なる臨時小政



談家あれば論の利害を考慮せずして妄りに稱讚し之れに唱和すると輕業の風向に隨ひ飄颺するが如き操守なき思想を有するもの比々皆然り是れ即ち創開日尙は淺く工商の潜勢力強大にして眞正の政事的思想を養成するの勢ひ尤も微力なるが爲めと及び純粹の政事思想を當道に養成せしものに非らずして本州に於て殆んど結果をなせる無主義蟻集烏合の輩聚散不定の徒の多ければなり即ち本州より當道に於ける無主義雷同者の腦髓に政事思想を注入して充分なる開發力を挑撥せしむるは困難なるが如し何んとなれば當道四集の雷同者は其己れの意に適するあれば説の是非論の高下を辨識し嚙下せずして妄りに稱揚し意に適せざれば罵詈排撃到らざる處なし此を以て政事家の卓絶なる見識も爲めに蠻霧の掩ふものあると同時に過激なる痛論の非常なる喝采を得るとあるは珍らしからぬ事なればなり此れ多年の經驗に斯くの如き境遇の幾多を跋涉し來りたる純粹政事家の政事界の利器を包藏して深く韜晦し實業界に入り將來持滿の末に發す可き根原即ち銳氣を養ひ根據を造り基礎を固めて以て時を俟ち妄りに辨を用ひざる所以なり蓋し本州に於て錚々たる政事家中望みを當道に屬するもの奮鞭馳駢を試みんと欲し渡航するものあるも彼等は土地の狀態に暗く人情に明らかならざるが爲めに空しく失敗し而して後ち當道は文化の度尙は稚かく

政黨上に缺く可からざる團結力甚だ寡少なるを以て全力を當道に盡くして政事熱を布く可き方法を講ずるの尙は早きを悟り慨然政事界を去て商業界又は實業界に入るもの多し勢ひ斯くの如くなるを以て當道中の小辨家の議論は到底完全なる政黨團結を組織する容易にあらざる可し況んや政事思想に冷淡なる殊とに商工の雨露に潤澤せる實業者に非らざれば一往一來の烏合雷同者に於てをや此を以て當道の施政漸く變して北海道議會の設立し若くは市町村の自治制を地方に實施するの時代に到らざれば黨派熱の沸騰は容易に見るを得ざる可きのみならず著しき政黨軋轢の活劇を演出する能はざるなり即ち十數年の將來に殖民事業の發達し文學的思想の當道内部に成熟するに非らざれば眞正の政事思想は望む可きにあらざるなり

### 第三 宗教

謬信迷想は此れ文明社會のものにあらず彼等は暗冥社會のものたり文明社會の宗教は高尚にして暗冥社會の宗教は頑陋なり案するに當道の宗教は文明社會三暗冥社會七とを加へ之れを折半したるものを以て定む可し  
抑も當道は本州各國人烏合蟻集したる新聚落の一大塊物なるを以て宗教の種類も隨



つて多し之れを大別して四種となす神派外派佛派儒派是れなり神教派の重なるものは出雲伊勢八幡黒住秋葉琴平宮島等にして明治二十二年度及び二十三年度に於ける社別及び神官の数は左の如し

年次	神官		神社		無格社		合計
	官幣小社	國幣小社	官幣小社	國幣小社	無格社	無格社	
明治二十二年	一	一	四三	二二三	二八七	五五六	
全	三	三	二八	八	八	五二	
明治二十三年	一	一	四九	二三四	三二九	六一五	
全	三	三	三一	九	五	五二	

佛教派の重なるものは天台真宗真言浄土臨濟曹洞黄蘗日蓮の八宗にして明治二十三年度及び二十四年度に於ける寺院僧侶の数は左の如し

年次	天台		真宗		浄土		日蓮		曹洞		黄蘗		臨濟		合計
	寺院	僧侶	寺院	僧侶	寺院	僧侶	寺院	僧侶	寺院	僧侶	寺院	僧侶	寺院	僧侶	
明治二十三年	三	三五	四	四八	二	二二	五	五六	六	一	一	一	一	一九一	
全	一	三五	四	四一	二	二二	六	六一	五	一	一	二	一	一八七	
明治二十四年	三	五五	四	四八	二	二二	六	五六	六	一	一	一	一	一九一	
全	一	五一	四	四三	二	二二	六	六一	六	一	一	一	一	一八五	

外教派には希臘天主基督「メソヂスト」等の布教あり儒教派には黄老孔孟王陽明等あり而して此等多数の諸宗教中勢力強大なるは真宗にして信者は全宗十五分の一弱即ち大略二萬五千以上を占む該宗の寺院を函館に設く規模宏壯青年教會を設く曹洞宗日蓮宗は之れに亞き勢ひ頗る大なり就中曹洞宗に佛教俱樂部を設く神教は固有の國粹保存主義を以て教澤を全道に布き到る處として排斥するものなく又た非常なる熱心者なき殆んど本州と其趣きを同ふせり儒教は教熱極めて微弱にして一二村夫子的の者稀れに水面上に跳越するものあるも彼等は凡庸一様のものにして一呼天地を撼動し一瞥能く物の中心核心を攫取し去る電光なきものゝみなれば之れを唱道するも眞の敬仰を得る能はず唯窮厄者の爲めに一時迷信の集點となるに止まるのみ獨り外教は巧手なる政略を以て宗教的學校を設け人の母たる子女を勸奨し教誡して布教の術を講し漸く潜務的隆盛の徴候を呈はせり蓋し此宗教たる戒規極めて整肅なるが故に當道の如き半開社會の實業者には適せざる可し何んとなれば當道の商業家及び實業家は大抵舊來の涅槃佛心を以て彼等が腦髓と筋骨とを組成したるものなればなり神教派及び佛教派は戸前に各宗の名紋を烙印したる標札を附し以て各宗の區劃を立て人をして一見其何宗たるやを知るを得せしむ



案するに當道に於ける一般の宗教熱は頗る高度に位して就中海岸地方及び諸商港の如きは一層熱度の高さを認め得可し是れ理あるなり凡そ本州各國より移住し或は渡航するもの什中七八は重みに既往に冒險を試みしもの及び將來に冒險を試みんとするもの天命に従ひ人運を試むるもの不義奸邪或は人を厄に擠し己れを利せしもの放蕩破産窟情身を誤りしもの其他各種善惡の集合したる玉石混合の一大塊物なるを以てなり此故に現時の福祉將來の利運を得んと欲するもの既往の非惡を悔悟し未來の業罰を解脱せんと希ふものは皆神佛の加護に依らざる可からざるの頑崇迷信を懷くを以て宗教の隆盛を致すの原因とはなれり是れ則ち當道中殊とに海岸地方に於ける宗教熱の勢力ある所以にして就中佛教及び神教派の尤も信仰と敬服とを得し所以なり爾後文學の工商と相並行して文運發達し當道の宗教に文明社會の特有なる高尚の加はりたらんには外教と佛教とは相拮抗して大に其勢を争ふ可く神教と儒教とは其間に浮沈して世と推遷し而して驚く可き恐るべき慘憺たる活劇を佛外兩教の間に演出するは絶えざる可しとなす是れ自然の數にして當時既に發芽とも稱す可き徵候を發見し得可ければなり

## 第十一章 北海道の工商業

### 第一 工商業の狀況

現今當道の商業地は重みに外部の港灣にして工業地は内部の都邑なり商業地と稱す可き處は西部に於ては函館江差小樽宗谷室蘭等にして東部は網走根室厚岸釧路大津等とす而して工業地は各國各處に散在し札幌を以て第一となす商業の重なるものは水産物農産物にして炭礦物及び雜貨は之れに亞けり工業の重なるものは製麻、製糖、製絲、製燧、製煉、製酒、製紙、製粉、製油、製網、製氷、及びセメント製造等にして此等は巨大なる工場に多くの産物を出せり而して此他尙ほ殆んど二十以上の工場あるも一々枚舉に遑あらず今北海道廳の報告に據つて工業諸會社及び製造所の種別を見るに明治七年爾來に於ける資本金五千圓以上のものを舉ぐれば左の如し

名	種別	業別	創立年月	所在地	資本金
島野造船所	乙	造船	明治七年六月	函館區西濱町	?
辻造船所	乙	造船	全一〇、五	區中濱町	?
硫黃製煉所	乙	硫黃製煉	全一一、五	斜里郡遠音別字知床	八、〇〇〇



改北 其海 組道 合魚 油	燧木 軸製 造所	日本 油臘 會社	札幌 麥酒 會社	北海 釀山 會社	札幌 製糖 會社	花菱 造糖 會社	北海 商會	札幌 製網 場	安田 機織 場	札幌 製絲 所	鑄造 場	栖原 鑄造 所	北海道 製麻 會社	紋籠 製糖 會社	安田 製所 黃山
甲	乙	甲	甲	甲	甲	乙	甲	乙	乙	乙	乙	乙	甲	甲	乙
魚油 精煉	マツチ 軸製 造	魚油 蠟製 造	麥酒 製 造	鑛業	甜菜 製糖	葡萄 酒製 造	土木 營繕	魚網 製 造	織物	生絲 製 造	鑄造	鱈鮭 罐詰	製麻 紡績	甜菜 製糖	黃探 及硫
全 二二、 一二	全 二二、 一九	全 二二、 一二	全 二二、 一一	全 二二、 一四	全 二〇、 一二	全 二〇、 一一	全 二〇、 一〇	全 二〇、 〇九	全 二〇、 〇七	全 二〇、 〇五	全 二〇、 〇五	全 二〇、 〇五	全 二〇、 〇五	全 二〇、 〇五	全 二〇、 〇五
久遠 郡久 遠村	有珠 郡長 流村 字措 籠	函館 鶴岡 町	札幌 北二 條東 二丁目	高島 郡手 宮町	札幌 北三 條東 三丁目	全 南四 條西 二丁目	全 北二 條西 二丁目	全 北一 條東 二丁目	全 北一 條東 二丁目	札幌 大通 東四 丁目	紗那 郡紗 那村	札幌 北七 條東 一丁目	有珠 郡西 紋籠 村	川上 郡熊 牛村 字標 茶	
八、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一五、〇〇〇	一〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	八〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	八〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	二二五、三三三		

古三 宇井 鑛物 山產 會社	横山 煉化 場	札幌 製粉 場	製氷 場	三扇 工場	平煉 化場	岩雄 登硫 黃山	三井 物產 會社	農具 製作 場	製網 場	木具 製造 所	札幌 活版 所	鈴木 煉化 場	岩内 採炭 組合	擴油 社	興產 社	製革 所
乙	乙	乙	甲	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	甲	甲	乙
銅鑛 業	煉化 製 造	小麥 製粉	製粉 製 氷	製粉 製 米	煉化 製 造	硫黃 礦 業	農具 製 作	魚網 製 造	木具 製 作	活版 印 刷	煉化 製 造	石炭 礦 業	肝油 製 造	製藍 製 作	製藍 製 作	製革
全 二〇、 〇四	全 二〇、 〇二	全 一九、 〇二	全 一九、 〇九	全 一九、 〇九	全 一九、 〇八	全 一九、 〇七	全 一九、 〇六	全 一九、 〇六	全 一九、 〇六	全 一九、 〇五	全 一七、 〇六	全 一七、 〇四	全 一七、 〇二	全 一五、 〇四	全 一四、 〇三	全 一四、 〇三
古宇 郡興 志內 村字 茂岩	札幌 郡月 寒村	札幌 大通 東二 丁目	松前 郡上 及部 村	札幌 南一 條東 四丁 目	札幌 北一 條東 四丁 目	札幌 北一 條東 四丁 目	札幌 北一 條東 四丁 目	札幌 北一 條東 三丁 目	札幌 北一 條東 三丁 目	札幌 北一 條東 三丁 目	札幌 北一 條東 三丁 目	岩内 郡芽 沼村	高島 郡稻 穂町	札幌 北四 條西 四丁 目	函館 區高 砂町	
四二、〇〇〇	七、五〇〇	五〇、〇〇〇	五、〇〇〇	五、〇〇〇	一〇、〇〇〇	二七、〇九五	?	?	?	六、五〇〇	一五、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	?	



遠藤煉化場	乙	煉化製造	全二三、	五	札幌郡白石村	五、〇〇〇
北海道電燈會社	甲	電氣燈	全二三、	八	札幌大通西三丁目	八、〇〇〇
徳田炭山事務所	乙	石炭鑛業	全二三、	九	岩内郡茅沼村	一五、〇〇〇
北海道セメント會社	甲	セメント製造販賣	全未開業		上磯郡谷好村	四五、〇〇〇
製紙會社	甲	製紙	全		未定	三〇〇、〇〇〇
電燈會社	甲	電氣燈	全		函館區船場町	四五、〇〇〇
總計	四十一					

右の表中甲は甲種にして資本を株式に分割せるもの乙は乙種にして株式に分割せざるものなり此他資本金五千圓以下の工場及び製造所等頗る多かるも一々枚舉に違わらず

抑も當道工商業一般の勢力を見るに其運動極めて敏捷活潑なるものと冒險單純なるものどあり而して前者は重もに東西兩部に於ける既開の都港に多く後者は未開地の都港に多しとす此れ殆んど事實なり何んとなれば既開地の商政は整然たる秩序を得交通は自在に遺利は殘るなく冒險的の射利は支離せらるゝが故に運動は敏捷活潑なりと雖も冒險單純なる能はず之れに反し未開の商業地は冒險家の突入するが爲めに百事混亂して整然たる秩序を得ず此故に遺利縱横之れを採拾する射利者の少きと

及び運輸の便を得ざるが爲め單純冒險なりと雖も敏捷活潑なる能はざるなり即ち遺利の多少運輸の便否物價の高低は自然に此くの如き懸隔を生したる所以にして抑も東部北海道の工商業の冒險單純に傾向し西部北海道の工商業の敏捷活潑に傾向せるは之れを現時に比照して明らかなり今や東西兩部に於ける商業地商業の勢力を見るに極めて旺盛に工業を凌駕し超然卓絶新渡航者をして當道都港の筋骨は商業を以て組織せらるゝの感を起さしむ然りと雖も此れ等は外部に於ける外見にして内部に於ける實情にあらざるなり何んとなれば商業の潜勢力は外觀上極めて著しきが如しと雖も之れを工業の潜勢力に比すれば大に劣れるを發見す可ければなり殊に當道の工業は明治十九年爾來非常の發達を以て進歩し現時は己に商業界と相伴ひつゝ幾多の單純なる射利を繼續せるに至れり而して當道工商將來の運命を見るに爾後十數年間は冒險單純なる射利を繼續し得可きも内部に於ける殖民事業の發達し外部に於ける一二良港の發見せられ文學政事的思想の東西兩部に遍く發達すると全時に現時の工商況を一小變せしめ人をして當道の筋骨は工商業を以て組織せらるゝの感想を生せしむるは自然の數にして殊に工業の勢力は文學と並行し良港の發見殖民の發達と伴ひ益隆盛となる可きは勢の然らしむる所なる可きなり此を以て將來當道の工



商業は殖民事業の進歩すると同時に其發達の勢力を増進するや疑ふ可きに非らざるなり

第二 工商業の方針

當道現時の工商家は本州及び當道に於て需要する物品を供給するを以て彼等か商政の重なるものとせり即ち當道の水産物を本州に輸出し本州の陸産物及び雜貨を當道に輸入して彼我の交易を試み直接及び間接に之れが射利の方法を講せり而して現時當道に於て産出せる輸出物の額數は之れを本州に於て産出せる輸入物の額數に比すれば比例上割合に其額數の少きを見る是れ大に理あるなり何んとなれば當道に向つての移住者は年々殆んど一萬人内外の移住増加と二萬内外の出稼労働者の増加と及び數千の渡航者の増加に隨ひ之れに供給す可き需要品の増加するあればなり今本州に對する輸出入を調査するに最近五ヶ年間即ち明治二十年爾來北海道廳の報告に因りて之れが統計を示せば左の如し

年次	輸出	輸入	輸出超過	輸入超過
明治二十年	五、六七三、〇五四	六、五一二、九八九		八三九、九三五
明治二十一年	七、七九七、四九三	七、七七一、七四八	二五、七四五	

明治二十二年 八、〇八四、四八七 八、五一七、一三四 四三二、六四七  
 明治二十三年 一三、二五一、九四七 一六、二六五、八八二 三、〇一三、九三五  
 明治二十四年 一二、九七二、〇〇六 一四、九〇九、八六三 一、九三七、八五七  
 合計 四七、七七八、九八三 五三、九七七、六一八 六、一九九、六二七

而して輸出品は其種別大凡二十四種にして水産物炭礦物毛皮農産物氷等とす就中最も多額なるは鱈絞粕にして二十四年度の輸出は七十三万四千七百九十八石價格四百四十五万七千六百六十三圓に上れり輸入物は其種別大凡二十四種にして米増鹽酒類より雜貨等とす就中最も多額なるは米にして二十四年度の輸入は八十三万一千四百三十四石價格五百九十八万九百二十八圓となす而して二十年爾來の輸入超過は六百二十九萬九千六百二十七圓に上れり是れ即ち最近に於ける過去五ヶ年間内國輸出入の多數にして右の如き輸入の超過は生産消費二方の不權衡より生したるものなるや明らかなり然りと雖とも讀者よ此れ豈久しく斯の如き不權衡を繼續するの理あらんや十數年の將來に當道開進の運命彰著し内に開拓事業の發達し外に一二良港の發見せらるゝと同時に現時の工商業を一變せしむるは數の然らしむる所にして此時代は即ち生産消費二方の權衡の相平均す可きの時なる可きなり今や當道に於ける工商の方針



を見るに有力なる工商家にして遠征を企て長筏を浮べて海外と一大商戦を試むもの  
 晨星の如く寥々たり是れ勢なり何んとなれば常道の都港中殊に東部は創開の日尙ほ  
 淺きが故に遺利縱横裕富散在此を以て常道商工家の感想は之れが利を外國に仰かさ  
 るも單に本州及常道の需要に應じて博利の餘裕あるを信すればなり然りと雖ども前  
 已に述べし如く常道商業の勢力は始終同一の處に止まるものに非らず十數年の將來  
 には必ず變動するを見る可きなり變動するの時代は是れ即ち常道工商家の競争波瀾  
 の如く外國に向ひて貿易を試む可きの時ならん歟加之魯國の夙とに企圖せる西比亞  
 鐵道の完成し東洋政畧の活動を始むるに至らば常道の西部は之れが商畧の折衝地に  
 當るが故に商畧上内外の争地となる可きなり殊に常道の西南部なる函館港より魯國  
 東洋政畧の集點なる浦鹽斯德港に至るの航路は大日本帝國中秋田縣土崎港を除き最  
 近の航程を有し海路僅かに四百二十四海里なり之れを横濱神戸の兩港に比すれば三  
 分の一海里を上下せり長崎港は之れが二倍弱海里にして新潟は函館より遠き四十六  
 海里なりとす即ち各開港場浦鹽斯德港間の航程を示せば左の如し

函館 直航 四百二十四海里  
 新潟 直航 四百七十海里

長崎 元山津を經 七百七十海里  
 横濱 函館を經 九百五十六海里  
 神戸 横濱函館を經 千三百十三海里  
 神戸長崎元山津を經 千五百十海里  
 長崎元山津を經 千五百十五海里

依是觀之當道南部に於ける良港は將來米魯貿易の巷に當り殊に薩哈噠島及滿洲地方  
 に向つて商畧を試む可き要衝地となるや疑ふ可からざる所なり今や當道に於て海外  
 貿易の導火線となすに足る可きものあり何んぞや支那に向つての水産物輸出是れな  
 り即ち十數年の將來に著しき良果となるべき萌芽にして漸次に海外貿易の遠征者を  
 見得へきなり而して當道に於て現時海外直輸出の最も多額を占むるの處は函館港に  
 して明治二十一年爾來に於ける最近五ヶ年間の海外輸出入を見るに左の如し

年次	輸出	輸入	輸出超過
明治二十一年	五三六、〇五四	三九四四	五三二、一一〇
全 二十二年	七八一、四四六	一一七、七〇六	六六三、七四〇
全 二十三年	八二三、〇三四	六七六、五三四	一四六、五〇〇
全 二十四年	六三八、七〇九	二二七、四八一	四二一、二二八
全 二十五年	七八二、八五九	一一、一〇一	七七〇、七五八



合 計 — 三五六二一〇二 — 一〇二七七六六 — 二五三四三三六

而して輸出物は其種別十餘種にして就中二十五年には昆布を以て最多とし輸出額千六百九十五万九千七百三十四斤價格三十七万二千百三十八圓に上れり輸入物は其種別十餘種にして就中明治二十四年度には金屬吳服を以て最とし價格十六万三千九百二十一圓に上れり而して二十一年爾後五ヶ年間に於ける輸出の輸入に超過する二百五十三万四千三百三十六圓の多きに上れり

案するに當道一般商工家の方針を見るに上流に位する冒險的商工家は長筏を浮へ巨浪を破りて遠征し海外貿易を試みんとし中流に位する商工家は當道の水産物陸出物を以て本州と彼我の交易を試みんとし下流に位する商工家は單に當道の需要に應じて之れを供給するを以て目的とせるは之れを本州に比するに商業の運動上に對し快活輕捷なる一段の上に特異なる處を發見すへし

### 第三 各國工商業家の氣質及び衣食住

當道蟻集の各國商業家の氣質に各長所あり短所あり今之れを六大種に區別して短評を試む可し

#### 第一 東北商人

#### 第二 北國商人

#### 第三 中國商人

#### 第四 西南商人

#### 第五 西國商人

是れなり東北商人は仙臺秋田山形等を以て之れを組織し仙臺を以て代表とす北國商人は新潟富山石川等を以て組織し新潟を以て代表とす中國商人は滋賀東京群馬等を以て組織し滋賀を以て代表とす西南商人は四國山陰山陽を以て組織し山口を以て代表とす西國商人は熊本鹿児島長崎を以て組織し長崎を以て代表となす

當道に於ける東北商人は捷輕にして敏速なり即ち圓轉なる滑才のもの多きか如く深謀耐久の商家なきに似たり而して彼等の最も得意なるは工業にあり實業にあり盤根錯節の商業は彼等が利器を用ゆる所に非らざる可し

北國及び中國商人は大抵着實にして鈍重に商略に器局あり就中滋賀及び新潟は儉勤自守耐久操守宛も歩牛の如し此を以て巨商大賈最も多きを見る

西南商人は北國及び中國商人に比すれば輕捷なり然り而して彼等に權譎者流甚だ多きを覺ゆ之れを東北商人に比すれば狡獪なり案するに北國西南中國の商人は工業よ



りも寧ろ商業に得意なるか如し  
西國商人は剛毅にして陰險なり能く巧慧なる手段を以て商才を假裝せり忍耐從事操  
守する所あり此を以て間々富豪者あるを見る彼等は東北商人の如く商業よりも寧ろ  
實業に得意にして且つ慣手なるか如し  
之れを簡言すれば東北商人は輕敏にして操守の略に乏し北國及び中國商人は力作儉  
勤にして商略あり西南商人は權譎にして耐ゆる所あり西國商人は剛險にして操守す  
る所あり

#### 工商人の衣食住

各國工商人の生計は之れが氣質と並ひ伴ふを以て余は茲に概畧の見界を示す可し  
抑も當道に於ける上中社會の衣は頗る高度に位し殊に商業地の如きは其服裝に意を  
用ゆる殊に著しきが如し之れに反し下流社會の服裝は比較的陋粗なり即ち中流以  
上の社會は輕裳暖衣を用ひ中流以下の社會は重もに筒袖即ち通稱「モヂリ」なるもの  
を用ゆ而して此等懸隔の尤も著しきは内部の都邑にあらすして外部の商業地に多きを  
を發見す可し例せんに殷盛なる商業地に於ける巨商大賈の主管より小价庸夫の如き  
も高帽長靴意氣揚々たるもの比々皆然るあり然れども今日紳士に擬裝し明日破衣壞

帽をなすも怪むものなきは是れ當道特異の風なり食はまた是れ奢侈に傾くが如しと  
雖ども衣服の比にあらす住に至りては上流社會は最も宏莊華美にして巍々たる大厦  
空を凌ぐも下流社會は之れに反し陋隘汚瀆の小舎に住するを常とす此上下階級の著  
しき懸隔は本州に比して殆んど數倍の見界あるを覺ゆ讀者他日當道の實狀を觀察せ  
ば余が言の妄ならざるを知らん

東北商人の衣食住は大抵華奢に傾向する他國に優れり北國及び中國商人は儉素にし  
て生計極めて簡單なり西南及び西國商人は北國中國及び東北商人とを加へ之れを折  
半したるものを以て定む可し彼等は質素ならず華奢ならず尋常の生計と謂つ可し元  
來當道の商業地に於ける一般の衣食住は高度なるが如しと雖ども之れを新開なる創  
業地と寒烈なる商業地との實情に向つて適當なる考察を下たしたらんには怪しむに  
足らざる可し而して新渡航者の偶々商賈主管の服裝を見て高等なる官衙の顯官と見  
解を誤るは珍らしからぬとなりしも此れ等は重もに外部の商業地に多く見る所にし  
て内部の工業地に多く見ざる所なり之れと同時に商業地に於ける下等社會の生計は  
勞働者を除き他は豫想外に困難なるが如しと雖ども竊情なる無職者に非らざるより  
は安全なる生計を營むと極めて容易なり此れ他なし當道の物價は之れを本州に比す



れば種類に因り數割貴きが爲めに當道に需要ある有職者は反つて活路を營むに本州より容易なる可きなり

案するに當道の商業地に於ける上下一般生計の非常に著しき懸絶ありて工業地に於ける上下一般の生計に著しき懸隔あらざるは故なきに非らざるなり從來當道の工商家中着實家あり冒險家あり而して此等は當初の困難より一段を経每段歩を進んで困難經驗星霜及び順序ある射利とを以て大抵巨利を一攫せし登龍のものゝみなれば極めて簡單なる經濟を應用し隨つて複雑なる經濟を活用するもの多からざるなり什中二三の儉素者なきにしもあらざる可しと雖ども彼等は強き流潮の爲めに牽制する所となり遂に朱交の感染を怪まざるに至れり即ち俄に得て俄かに失ふ七轉八起者流の多きを以て彼等自身の生計は自己に倣し待らる可き衣食住をなすものなり

## 第十一章 北海道の都港を論じて大勢に及ぶ

孫子曰知彼知己百戰不殆不知彼而知己一勝一負不知彼不知己每戰必敗と抑も知彼知己は是れ兵家の利用する妙略奇策の因りて出づる源泉にして之れを活用するに非ざれば百戰百敗得て善後の功を奏する能はざるなり縱令ひ破天荒地の勇武あるも神機

妙算の智畧あるも感神哭鬼の威仁あるも己れを知り彼れる知るに非らざれば深謀遠策も其活用を得る能はざるなり内治外交修身齊家設令へば外交政畧にありては先つ他邦の地勢現時の國是上下の輿論兵の強弱民の貧富文化の進否工商の隆替宗教の種類人情風俗習慣嗜好及び人心の傾向等を探知して現時に於ける我國の状態と比照し内治にありては當時の國勢朝野の輿論人心の傾向等を察し之れに對して施す可き政略の方途を定め而して後ち臨機事に應ずるの策を講じて奇合正勝の善策を求むるは是れ處世政略の大本にして真正の兵畧家商畧家の尤も輕々に看過す可からざる所なり於是乎當道の大勢を論ずるに先つて大日本帝國の北門を組成する港灣都邑の實狀を講述して己れを知るは必須のとなりとす

抑も世人北海道を以て大日本帝國の北門となし將來に於ける東洋の大勢を研究せんとするに當り魯國の東洋政畧に對し之れを樞要の位置に配して世の警戒を喚起し之れか覺眠の方法を講ずるに汲々せざるものなかりし而して此等は唯單に當道は北門の鎖鑰なりとのみ疾呼して北門の鎖鑰は何に因りて組織せらるゝかを唱道するもの稀れなり他隣邦との關係を論じて當道將來の大勢に及ぼすものありと雖も北門の鎖鑰を組織する材料を詳述して當道現時の大勢に及ぼせるもの殆んど稀れなり是れ豈



に小魚を容るゝの網呑舟の魚を洩らすに異ならんや抑も北門の鎖鑰なる文字は何に因りて當道に配置せられしやと問はば答ふるもの蓋し當道は大日本帝國の北部にして將來魯國東洋政略の衝路に當り國防上樞要の位置を占め之れに對して軍事上商略上の關係重大なるに因ると言はん然らば北門を閉鎖して之れに據り國防を萬全ならしむるの方策は如何にして可なるやと問はば答ふるもの何を論據として百戰不殆の廟算を案出するや此れ余が最も問はんと欲する所なり而して論者中當道の状態に通せざるものにして往々架空虚構の想像に因り當道の國防を論じて萬全の策善後の法を案出せんとするものあり是れ殆んど岫雲の雨あるを慮らずして驟雨の衣を濕はすを悲しむものと等しからずや經世の畧を講ずるもの先づ己れを知らざる可からず彼自國の形勢を審らかにせずして妄たりに他邦の状態を妄測し立論以て國防的處世の政畧を講せんと欲する豈に夫れ誤りなきを得んや此故に當道の状態を審らかにせずして妄たりに魯國の東洋政畧を講ずるもの焉んぞ基礎の脆弱なる高塔に異ならんや徒らに遠き慮のみを考へ近き憂を測らざるは禍ひ墻壁の間に起らざるを保し難さのみならず不意の外寇何に因りて防禦の術を盡すを得んや是れ大に己れを知らざる可からざる所以なり夫れ北門の鎖鑰は北海道なり北海道は大日本帝國の北門にして之

れが警戒は將來に於ける魯國の東洋政畧に對し商畧及び軍畧上の樞機を開閉する最重なる管鍵なり此管鍵とす可き北門警戒の國防は北海道の兵商工農を安全に保護し内治外修の勢力を發達せしむると同時に大日本帝國の北門を保護して之れが皇威を持續し帝國北門の外寇を防ぎ安全なる北部の國防を確かめ大日本帝國の經濟を緩急せしむるものにして北海道にありては富源を活動せしむる商事と之れを安全ならしむる軍事との二つに外ならず而して此二箇の原質となり之れが運命を活動せしむるものは蓋し重要なる都港に外ならざるなり即ち北門の鎖鑰は重要なる都港の富強なるものにして余が北海道の大勢を論ずるに先づて最も熱心に之れを講究し以て己れを知らんと欲する所以なり

抑も北門の鎖鑰を組織する原質二あり一は内部にして一は外部にあり内部の都邑に於けるが如く外部の港灣に於けるが如き是れなり而して當道の地たる四周繞らすに海を以てするか故に殷富なる港灣の外部を裝飾するあるも内部は尙ほ未だ寂寥を免れざるを以て之れが大體の立論を定むるに方り豫め假りに將來の要地を指定するに過ぎず此故に外部を主とし内部を客として當道の國防を論ずるは立論の勢ひ然らざるを得ざる所なり然れ共北海道の港灣都邑は其數凡て十數處に上り一々之れを論ず



るは容易に非ずして却つて煩雜なるが故に四周に於ける最も要勝の港灣を主とし内部に於ける重要な都邑を客として而して後國勢の大体を論定せんと欲す是れ余が立論の根據なりとす余は外部の港灣を三種に分らん即ち假定軍港、要港、商港是れなり假定軍港は厚岸にして假定要港は網走室蘭なり而して假定商港は函館、小樽、留萌、宗谷、根室、釧路、大津となす重要な内部の都邑は札幌、岩見澤、空知太、上川、標茶となす夫れ第一假定要港室蘭は北海道の南部なる膽振國南端内浦の灣中にあり岬角灣曲し灣前一小島あり風波を凌ぐに足り海底深くして大艦を容るゝに足れり北部は低原にして屯田兵地あり灣口輪西と相對し沿岸は屹然たる岩層を以て鐵壁をなせり而して此れより當道内部を縦貫する鐵道あり「イトスケレツプ」の岬角より起り漸く北して海岸を走り膽振國苦小牧より内部に進入して夕張原野を過ぎ岩見澤に至り一は北して愈々内部に入り空知太に於て斷絶し一は岩見澤より西南し札幌を経て假定商港小樽に達せり蓋し此直長なる鐵道は室蘭を起點とし將來網走厚岸の二大港數商港及ひ數都邑を連絡せしむる金剛繩にして實に當道北門の鍵鑰を安全に緊束するものと謂ふも不可なきなり

抑も此直長なる單軌鐵道は軍用上必要のものなるや否や余は軍事上よりも寧ろ商畧

上の必要を感ずると多きを主張するものなり何んとなれば商畧上函館上川間貨物の運輸は函館小樽間水路の危険にして且つ遲緩なるよりも室蘭より陸路を経るの安全にして且つ急速なるに若かざればなり按ずるに室蘭港の位置たる他の網走厚岸港に比し軍畧上樞要の地位に非らざる可し然りと雖ども一旦事あるに際し縱令ひ安全ならざる鐵道と雖ども兵は拙速を貴ぶを以て本州及び當道の南部より陸路此鐵道に因りて軍器兵士を送る海路の如き敢て猶豫をなすの慮なければなり此を以て平時は急速に安全に本州及び當道南部の貨物を内部に輸入し北部の假定要港網走と連絡を通じて商畧上の便益を補ひ東南部に事あるに際し假定軍港厚岸の應援をなし其西部に事あるに際しては陸路札幌に出で海路津輕海峽を廻りて小樽留萌商港の危急を救ひ得可ければなり嘗つて室蘭を以て軍港となす可きの説輿論となり再變して軍港は非なり之れを貿易港となし更らに本州北部の小湊港を以て軍港となし有事の際敵背を拊つ可しとの説勢を得るに及び輿論は再ひ之れに與みたり余を以て之れを見れば室蘭港の位置たる軍畧上自己の保護防禦よりも他の應援に必須にして網走厚岸の如き國防上樞要の地にあらざるなり然りと雖も若し夫れ軍備を廢せんとせんか平時事なきの日は内海四近及び函館商港の海防は安全なる可しと雖も其當道の南部及び本



州の北部に事あるに際しては自己の保護を完ふし他の危険を援ひ緩急相應する率然の如くなる能はさればなり此を以て室蘭港を假定要港となし以て軍用商路兩用に備ふるは策の得たるものなる可し

第二假定要港を網走とす網走は當道の北部北見國の中央部にあり網走河を控へ西南は網走湖に瀕し東は美幌高原の北端に沿ふて斜里の平野に接し南部は原野遠く連り茫々たる草原天涯限りなきが如し北方は「オコック」海に臨む海底深からざるも淺からず風荒く波激するの時小舟を碇泊せしむるに便ならざるも大艦を繋ぐに足る可きの處あり此地は當道の北部中尤も樞要の位置に居り西南は天北山脈の支脈を繞り四十餘里にして石狩國上川に達す可く是れより南方二十餘里一は西南に折れ札幌を経て小樽商港に出つ可く一は直進南行夕張原野を縦貫して假定要港室蘭と相聯絡す可し而して東南は千島山脈の高原を超え釧路に出て釧路の低原を経て假定軍港厚岸に通す可し其海路にありては北海道の最北部なる宗谷商港を庇護し水陸與に根室商港の危険を救ひ千島群島の安全を保護す可し此故に平時は北見地方殖民地の藩屏となり當道西北部より千島群島に對する貿易の針路を擴張せしむる媒介となると全時に一方には當道内部の重要なる都邑の安全を維持す可く有事無事與に當道北部の國防

上尤も重要にして且つ必須なるの要港なり案するに此地たる三大港中不等邊三角形の頂點に位し東西南北交互往來の集合點を占めたる軍事上及び商路上の争地なり何んとなれば西部の小樽商港よりは札幌を經南部の假定要港室蘭よりは直接に東部の假定軍港厚岸及び釧路根室の諸商港よりは短少の時を以て安全に貨物を交互相輸送するを得可ければなり加之樺太の南部地方の商船は將來當道の貿易に應ずるに北部にありては網走港を最とし西部の小樽商港に向つて輸出を試むるや明らかかなり此れ余が殊に網走を以て商路上及び軍事上に於ける當道北部第一の要港とせし所以なり

論者或は曰はく網走港は海底淺く蒸氣濃く風波激して大船を泊する能はず要港となすに足らざるなりと是れ大に理あるが如しと雖も蓋し一を知つて其二を知らざるの論なり抑も軍路上及商路上の争地とす可き要勝地は海の淺深にあらずして要勝なる天然の地勢及び他の都邑に對し直接に重要なる關係を有するの地にあり海底の淺き港灣の狭き何んぞ憂ふるに足らん是れ人力の能く之れを變動し得べきものなり然りと雖も天然地勢に至りては之を變動する能く人力の企て及ぶ可からざるものあり何んとなれば元來土地の盛衰は地勢に制せられ國の興廢は土地の隆替に制せ



らるゝものなればなり即ち余は將來千島群島の防禦宗谷の保護は要港室蘭にあらずして假定軍港厚岸にあるを信するなり假定軍港厚岸にあらずして假定要港網走にあるを信するなり

第三假定軍港は厚岸とす厚岸港は北海道の東部釧路國の東南部にあり厚岸灣の右側宋渾と鹹湖との間にあり北は鹹湖を控へ一小海峽を隔て、釧路の大原野に連り前面は海に瀕し背後に屯田兵地あり東部は砂濱遠く根室に達するの渺茫たる一大低原を控ゆ灣前大黒小黒の二小島あり尻羽岬其前面に突出し灣内二小岬あり自ら一小灣をなし與に風波を凌ぐに足れり海底極めて深く灣内頗る廣さを以て大船巨艦を容るるに足れり此地は北海道の東部中軍事上及び商略上最も樞要の勝地なり東は釧路原野を経て海陸路與に根室商港に近く西は海陸與に大津釧路商港に通す可く北は標茶を経て直進北見の網走に達す可し地位東南部にあり根室商港を東にし大津釧路の商港を西にして東南部國防上の要衝に當れり而して一日當道の西南部に事あるに際し海路假定要港室蘭と相合縦し津輕海峽より出つ可く一方は陸路網走を経て内部に入り小樽及び留萌商港の危険を救ふ可し而して其北部及び千島に事あるや海陸路與に網走と連衡して之れが矛盾となり外部に於ては根室釧路十勝原野の殖民地を庇翼す

ると同時に東部北海道の安全を持続するのみならず商略上の裨益もまた少しとせず何となれば東部の海産物を内部に輸り内部の貨物を東部殊とに千島に輸入するの媒介をなす少々にあらざるなり此を以て平時は東南部の商略を發達せしめ事あるに際し軍事上率然の如く緩急相應援するの要勝を占むるか故に殊に余が厚岸を以て東部に於ける將來の軍港と假定せし所以なり

余は已に北門鎖鑰の要素とす可き三大假定要港に付き當道の國防を研究するに必要なる之れが材料を講述したり尙ほ歩を進め三鑰を連鎖して當道將來の大勢を卜するに方り軍用商用殖民鐵道布設の必須なる可きとを發見せり此故に之れが現状と及び將來に要す可き鐵道假設のとい就き之れを講究して商港に及ぼし以て己れを知らんと欲す

夫れ現今已に布設の鐵道は當道の南部なる第一假定要港室蘭より起り膽振國の東海岸を蜿蜒し苦小牧より内部に入り石狩國夕張原野を縦貫して空知郡岩見澤に於て一は西南に折れ札幌を經西部の假定商港小樽に連絡せり一は北部に進み空知太に於て斷絶せり即ち第一假定要港室蘭は内部の札幌岩見澤空知太に連接せるも第二假定要港より空知太に至るの間は既設道路あるのみにて未だ鐵道布設の運に至らず而して



假定商港留萌は當道西北部の良港なるにも係らず僅かに上川間の既定道路あるのみにて懸山幽谷緩急事に應ずる能はず第三假定軍港厚岸と第二假定要港網走間の鐵道は三分の一強は既に布設せられしと雖ども單に硫黄輸出の目的を以て硫黄山より標茶に至り水路釧路商港を連絡せるのみに止まり兩要港間は未だ鐵路の連絡を一にせざるなり而して第一假定要港室蘭と第二假定要港網走とを連絡するに將來布設を要す可き鐵道は上川原野を過ぎ天鹽岳の幽谷を繞りて北見に出づるものにして線路の里程凡そ五十餘皇里なり又た網走厚岸間の距離は殆んど四十餘皇里にして十餘皇里は既設鐵道に係れり即ち網走より千島山脈の圓谷に隨ひ硫黄山に出て標茶より斜里山の南傾せる高原を経て厚岸に至る此を以て第一假定要港室蘭と第三假定軍港厚岸とを連絡するに將來に殆んど八十餘皇里の鐵道を布設す可きを要す斯の如くんば當道の東西南北の四部は連絡を通して一線となり厚岸を首とし網走を中とし室蘭を尾としたる一長曲線の鐵道を以て外は四周の港灣を連絡すると同時に諸商港に向つては軍事上の緩急相應して其危険を保護し安全を持續すべく内は開拓殖民上に完全なる急進の段階を與へ文學政事宗教の發達に燦美の先輝を添へ軍事商略上に向て莫大の鴻益を附與するや明らかかなり此れ即ち余が殊に當道中の最も樞要なる勝地を

撰み三大要港を假定して當道の大勢を論ずるの根據とせし所以なり孫子曰率然者常山蛇也擊其首則尾至擊其尾則首至擊其中則首尾俱至嗚呼讀者よ當道の國勢は十數年の將來に於て夫れ率然の如くなるを得るや

余は已に當道の鍵鑰とす可き材料と及び之れを連鎖せしむる金剛繩とす可き原資とを講述し了れり是れより進んで將來當道の軍事上及び商略上に向つて大關係を有する魯國東洋政略の皮裏を探り西比利亞の運命を活動せしむる西比利亞鐵道の將來當道に及ぼす關係を研究せんとするに當り魯國が何故に此長延なる鐵道を布設するやを研究するの必要を發見せり何となれば當道の狀態を講究して既に己れを知りし上は進んで彼れを知らざる可からず是れ軍事上及び商略上に於ける百戰不殆の廟算を案出するの一大要素なればなり

抑も魯國の西比利亞鐵道を布設せんとするは何の爲めなるか是れ東洋政略の眼目たり東洋政略とは何んぞや蓋し東洋局面に向て貿易の針路を擴張し西歐地方の貨物を東亞に輸出すると同時に一方は軍略上の方圖を強確ならしめ南北相通して緩急の應援を圓滑ならしめ西比利亞の曠原を開拓して殖民政略を伸張し以て草昧の中に埋没せる新富源を開發せんとするが爲ならん是れ大に事實なるに似たり何んとなれば西



比利亚に對する魯帝の目的とする處は高加索人種を固結し西比利亚鐵道を利用して東洋局面に向ふを見れば此三點の外に出づ可からず殆んど魯國の北都なる莫斯科より西比利亚の南部なる浦鹽斯德港に連絡するは當道の東部なる厚岸と室蘭を連絡せしむる鐵道に異ならざる鴻益を存すればなり此れ魯國が莫大の費と殆んど無限の力を勞し財政の困難なる國家の多事なるにも係らず朝野擧つて銳意力を西比利亚の鐵道に盡す所以なり按ずるに鐵道布設の工事たるは財政困難國家多事の時に當りてや宛も他邦と戰爭あるが如し唯單に工事は一時の困難を以て百世の福祉を得軍事は非常の僥倖を得るに非ざれば將來の困難を醸して禍を百世に遺すの異なるのみ此に於てか余は疑ふ魯國西比利亚鐵道の工事たる前三大要素の外他に一種秘密の政略なきや即ち現時に於ける國家の感情を東洋に向つて注かしめ多難を未然に防遏するに非ざるなきや此れ理想外の豫想ならん此故に余は此意外なる想像を論ずるの必要を發見する能はざるなり唯是れより歩を進めて西比利亚鐵道の將來當道に於ける商略上及び兵事上に及ぼす關係を論究せんとす

抑も西比利亚鐵道は今後數年を以て工事の竣成を告ぐるに至る可きは此れ已に讀者の了知せる處ならん而して此工事の成ると同時に魯國の夙望に希望して已まざる東

洋政略は漸く活運を始め鐵道を利用して鷺翼を東洋に伸ぶるの計劃をなすは疑ふ可からざる事實にして内は開拓殖民採鑛より外は軍事商略に至るまで熱心に之れが擴張策を取るや必せり而して其當初參商懸隔殆んど數千里の江山を隔つが爲め浦港の四近及び樺太地方の水陸産出物の饒多なると氣候の魯都より數度の高温なると東洋政略を取るの要地に當るとを知らざりし魯國北部の人民は争ふて浦港近傍より樺太地方に移住者を見得可く殆んど我國人が數年前に於て北海道に向つて注きたる感想と同一一般ならん此故に魯國の西北部に睡眠せし冒險家射利を睥睨せし投機者は競ふて冒險的及び實業的探檢を浦港の東西に試み樺太地方に遠征を試むるもの多かる可し今や魯國人民の樺太地方を視ると殆んど我國人が千島を視るが如きと同感ならんか何んとなれば西比利亚鐵道は第一假定要港室蘭と第三假定軍港厚岸間との鐵道の如く樺太は千島の如く唯北門と南門との異なるのみなればなり此を以て西比鐵道の竣功を告ぐると同時に魯國の東洋に對する商略は浦港を中心とし支那及び我國に向つて充分の擴張策を伸ぶるの端緒に就く可きものと謂はざる可からず是れ大に當時に於て講究し置く可きとなりとす

抑も北海道に於て將來魯國の商略に向ひ之れに應じて商戰を試むるに足る可き要港



は何れなりやと問は、余は北部にありては網走西部にありては留萌小樽南部にありては函館を以て之に配當せん前已に述へし如く網走は北海道北部の要港にして留萌及び小樽は西部中の良港なり而して函館は南部に於ける最大の良港にして此れより西比利亞鐵道の起點乃ち魯國東洋政略の燒點なる浦鹽斯德港に至る僅かに三晝夜小樽よりは之れより少長時間を以て航海し得可し此を以て當道中將來魯國東洋政略中商略の折衝する處は此四箇の要港に過ぐるの地あらざる可し然り而して當道の最北部なる宗谷港の如きは三角尖頭に位し尤も先きに朔風を感じ尤も早く魯船を見得可べく樺太と距る最近なるの處は呼へば將さに應へんとするが如き處に位するを以て國防上警戒を加へざる可からざるが如しと雖も宗谷の地たる軍備を用ゆ可き處にあらざる其地位孤立海路陸道與に緩急相應援に不利にして且つ港灣の狭小海波の荒激は大小の船舶を繋ぐ能はず加ふるに其近傍僅かに數千萬坪の原野あるに過ぎずして之が四近の地積を算するも數百戸の屯田兵を移住せしむるに足らざるなり此故に宗谷を以て假りに軍用地とせば果して如何他日有事の際却つて敵の好餌たるに過ぎざるなり之れが地勢を接するに單軍孤城一朝の陸戰は防禦の術なきにしも非らざる可しと雖も其他國と戰ふや必ず海戰ならざる可からず海戰は宗谷に於て利とする處

にあらざる此れ軍用に不利なる所以其商略に於けるも當道重要な商港となすに足らざるなり其地勢たる天北山脈の北端に盤居し海運陸輸の便利あるに非らず留萌小樽函館其他諸商港の如き他の都邑と重要なる關係あるに非らず唯其沿海に産する水産物を輸出し他より輸入せる供給物を宗谷四近の地方に利用せしむるに過ぎず此故に宗谷を以て唯僅かに形骸を備へたる商港と言ふの外なきなり此れ余が大日本帝國北門の警戒は獨り北海道の北部にあらざして東西南部も等しく之れに關係せるを主張せる所以なり即ち將來魯國西比利亞鐵道の竣成し東洋政略の彌其活運の端緒を顯はすに至るの時は當道の良港なる小樽留萌網走函館の漸く商略上の發達を始むるの時なる可きなり

夫れ北海道の西比利亞鐵道に關係ある斯の如し而して世の北海道を論するもの即ち曰く北門の警備輕忽にす可からず魯國の貪爪恐る可しと宜べなる哉其治に居つて亂を忘れざるや然れども余を以て之れを視れば北海道の警備輕忽にす可からずと雖も魯國の貪爪恐る可しと云ふに至りては怯もまた甚しと謂はざる可からず抑も今日の魯國は財政圓滿なるに非ず軍事完備せるに非ず工商隆盛なるに非らず而して魯國の西比利亞鐵道を設置する蓋し西比利亞の富源を開發しつゝ東洋局面に向つて軍事



商略を伸張し得可き利器の鍛錬を實行するに過ぎざるなり今假りに魯國をして軍事を動かさしむるとせんか凡そ軍事の事たる財力疲弊工商衰替なれば到底其旺盛完備の活運を見る能はず商略に至りては大に之れと異なれり此を以て今日に於ける魯國内部の状態を観察せば不完全なる軍事を動かして民力の疲弊を招くよりも富國利民の根據なる商略を東洋に試むの當時に急務にして且つ利なるには若かさるなり即ち十数年の後にあらざれば軍事を動かすは魯國の不利とする所にして且つ之れを動かさんと欲するも將來に幾多の災厄の之れに繼續せるを鑑みたらんには之れを實行するに難かる可きか已むなく之れを動かすと假定せよ薄弱なる財政疲弊せる民力は到底充分なる戦闘を試むる能はさればなり即ち現時に於ける魯國の東洋政略は軍事上よりも寧ろ商略上に傾向するを知り得可きなり此故に余は軍事上魯國の政略を恐るゝものに非らず寧ろ喜んで西比利亞鐵道の利用を待つものなり夫れ魯國の現狀斯の如く北海道の形勢斯の如し彼我相對照して而して今日の急に講究す可き國家問題を取らば蓋し軍略上よりも商略上にあるを見る可し此れ余が北海道の大勢を論するに方り豫め軍港要港商港を假定し一方は軍略上に就きて當道國防上の骨子を定め一方は商略上に就きて當道經濟上の筋肉を固め即ち國家問題たる當道の國是を假定し以

て西比利亞鐵道の將來當道に及ぼす關係を述べ遍く世の識者を待たんとする所以なり

孫子曰夫未戰而廟算勝者得算多也未戰而廟算不勝者得算少也多算者勝少算者不勝然况於無算乎



明治二十六年十月廿五日訂正印刷  
全 二十六年十一月一日再版發行

\*\*\*\*\*  
定價二十五錢  
\*\*\*\*\*

版權所有

編述者 北海道渡島國茅部郡尾札部村字木直  
七十七番地 筑波篤司

發行者 東京市京橋區南傳馬町二丁目五番地  
目 黑 甚 七

發行所 新潟縣古志郡長岡町大字表四町廿番戶  
目 黑 十 郎

全 東京市京橋區南傳馬町二丁目五番地  
全 支 店

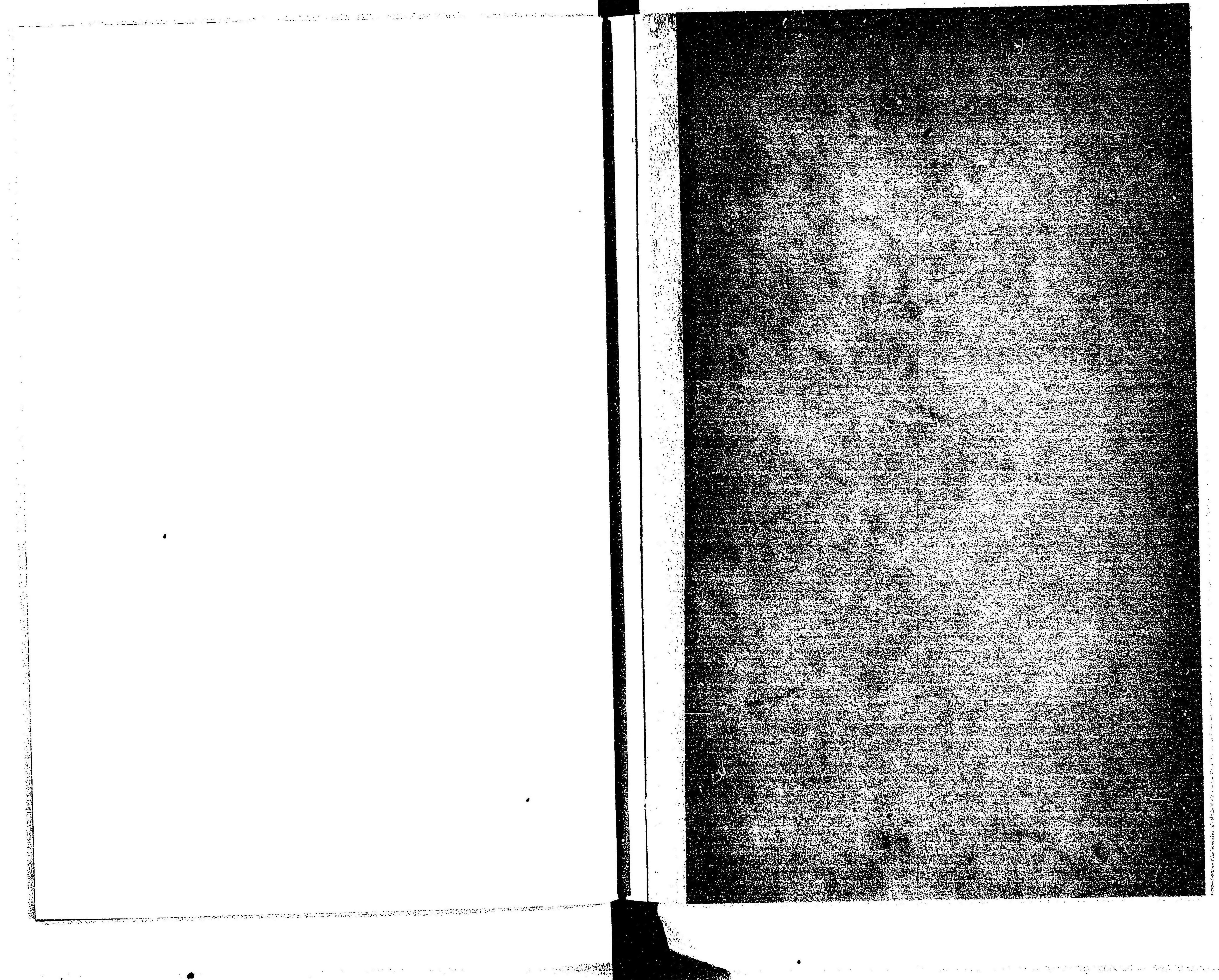
印刷者 東京市京橋區瀧山町七番地瀧關舍  
澁谷信次郎



肆書捌賣大別特

全 鐵砲町	名古屋本町	福岡市博多	松江市	德島市	岡山市	廣島市	京都	全 北久太郎町	全 南久寶寺町	全 大阪備後町	神田小川町	京橋區弓町	全 大傳馬町二丁目	全 本材木町二丁目	全 室町三丁目	全 若松町	全 新大阪町	日本橋通一丁目	
三輪文次郎	川瀬大助	積善館支店	川岡清助	坂井萬吉	竹內彌三郎	清水庫三郎	田中治兵衛	柳原喜兵衛	前川善兵衛	梅原龜七	吉岡平助	中西屋邦太	松村孫吉	長島恭三郎	杉本七百九	榊原友吉	小林喜右衛門	大倉孫兵衛	
岩代福島	磐城白河	上總東金	下總古河	常陸國水戸	全 松本	全	全	信州長野	野州宇都宮	全 高崎	全	上州前橋	甲府柳町	新潟市	鹿兒島仲町	照本新二丁目	伊勢津市	遠州濱松	
上野屋彦太郎	奧村市左衛門	多田屋書店	高木正々堂	川又銀藏	水琴堂書店	荻原朝陽館	增屋商店	西澤喜太郎	田中正太郎	煥乎堂書店	文江堂書店	煥乎堂書店	柳正堂書店	櫻井産作	吉田幸兵衛	長崎次郎	川島九右衛門	高須廣吉	谷島源三郎
全	全	全	全	全 札幌南一條	全	全	北海函館	全 鶴ヶ岡	山形縣山形	全 八戸	全	青森縣弘前	陸中國盛岡	陸前石巻	全	仙臺國分町	全 郡山	全 須賀川	磐城三春
白鳥書店	東條喜太郎	進振堂	聚文堂	前野長發	愛新軒	重陽堂	魁文社	小池藤次郎	五十嵐太右衛門	浦山政吉	赤平商店	野崎九兵衛	便益堂書店	山口啓之助	佐藤養治	有千閣書店	富屋久之丞	橋本太平	渡邊英一











特20

319

拓殖  
指導 北海道実況

国立国会図書館

042096-000-7

特20-319

北海道実況

筑波 篤司 / 編

M26

BDI-1040

